

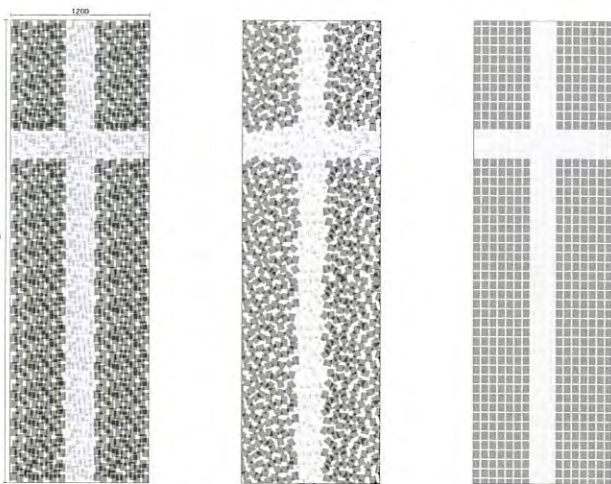
「京都シオンの丘キリスト教会」の礼拝堂。
天井から吊ったファブリックはNUNOの製
作。光にやわらかく透ける透過度の差によ
って十字架を表している。

建築にテクスチャーを
まとうせる 3

堤 有希 / NUNO

たった一つの答えに寄り添う

取材・文 / 清水 潤 撮影 / 梶原敏英 (特記をのぞく)



布チップの置き方の選択肢を提案

右図/教会ではチップの置き方を3パターン提案した。右はタイル貼りのようなパターン。中央はチップの方向がランダム。最終的には左の少しずつ重なるパターンが採用された。左/光に透ける十字架のファブリック。十字架部分のチップは透過性の高いオーガンジー、それ以外の部分には白色系でシンプルな意匠の生地のチップを用いている。

DATA

所在地/京都府京田辺市
 構造・規模/鉄筋コンクリート造2階建て
 改修竣工/2011年11月
 改修設計/ishida + hatanaka studio (石田真司・畑中恵美)
<http://www.i-h-studio.com/>
 使用ファブリック/NUNO「つぎはぎシリーズ」をもとに特注制作
 写真/表 恒匡 (p.29), ishida hatanaka studio (p.31左)

京都シオンの丘キリスト教会

建物を改修し、キリスト教の礼拝堂が設けられた。多くの人が輪になって集まり、祈りの場をつくるというコンセプトで、座席が取り巻き礼拝堂の中心をかたちづくっている。壁面は既存の窓の内側に垂れ壁と腰壁を設け、その間から間接的に外光を取り入れており、十字架をやわらかな光に透ける素材で表すために、NUNOのファブリックが使われた。たくさんの布のチップを貼るといった技法の提案が、人が集まるというコンセプトにぴったりと合った。



十字架のファブリックはこのNUNOの「つぎはぎシリーズ」をもとにした。「つぎはぎシリーズ」は端布を保存しておき、たまったところで布片(チップ)をつくり、ポリエステルオーガンジーのベース生地の上に、6×7cm角ほどに切って配置。線描の刺繍で縫い付けている。チップの取り合わせが楽しい。¥18,600/m (W120)。黒、カラーもある。価格はすべて税別。

プロジェクトの伴走者として 理想の一枚を追求する

NUNOは日本を代表するテキスタイルプランナー・新井淳一さんが1984年、東京・六本木に設立。その後、テキスタイルデザイナーの須藤玲子さんが引き継ぎ、33年を迎えようとしている。日本の織物の伝統と現代の繊維工業技術から、豊かな発想力で布のポテンシャルをかたちにして、世界の幅広い分野のデザイナーや建築家を魅了してきた。現在、10人ほどのテキスタイルデザイナーが在籍し、デザイン、生地づくりから販売、仕立て、展示会の運営



堤 有希 Yuki Tsutsumi
 テキスタイルデザイナー。1986年山形県生まれ。武蔵野美術大学在学中からNUNOでアルバイトし、その後メンバーになる。ファブリックのデザインとともに、建築・インテリアへのファブリックのコーディネーションを担当し、空間を生かすさまざまな提案を行っている。「どんな小さなことでも、気軽に相談していただければ」と堤さん。NUNO連絡先はp.33。

ほか、日常業務のすべてを行っている。建築にファブリックを採用したときには頼りになるパートナーだ。NUNOの一員となって8年目の堤有希さんも担当者の一人。コンセプトにふさわしい生地を選んだり、技法を応用してつくったり、縫製して仕立てたりと、空間とファブリックを取り結ぶ役割を果たしてくれる。「平面に広げて見て、何気ないデザイナーの生地が、空間に立ち上がったとき、その場の空気をぐっと引き立てることがあります。その瞬間が大

好きですし、そうなるように仕事をしたいと思っています」

ファブリックとの出会いは武蔵野美術大学在学中に訪れた。布で何ができるか学びたいと思いながら、ファッション、インテリア、環境計画など、幅広いコースがある空間演出デザイン学科にいた。それが2年生のとき当時NUNOに在籍していた安東陽子さんの特別講義を受け、ファブリックがもつ力に気づかされた。「布の使い方や空間が変わることに驚きました。それがきっかけで、生地そのものの成り立ちから勉強したいと思い、テキスタイル科に転科しました」。

おもに手織りを学びつつ、さらに3年生のときに、独自の生地がどのように生まれるかを知りたくてNUNOの扉をたたき、アルバイトをさせてほしいと懇願しては断られ、半年間繰り返して、ようやく受け入れられた。メンバーがこうしたいと希望すれば、どんな背中を押すのが須藤さん。群馬県桐生などの織物産地で現場の人や技術に触れることができる環境も、堤さんを育てた。

建築家がどのような空間を求めているのか、堤さんはコミュニケーションをとりながらプロジェクトに奔走していく。建築家・畑中恵美さんは「京都シオンの丘キリスト教会」の礼拝堂の設計(29~31ページ)で、多くの人が輪のように集まるという

コンセプトに対して、小さな布が人のように重なり十字架を表す堤さんの提案に強く共感したという。NUNOのオリジナル作品の技法から発想したもので、「ひとつのチームとして、とても楽しい経験でした」と畑中さん。

建築家・錦織真也さんが「GクリニックII」(34~35ページ)を設計したときには2カ月という工期の短いテナント工事のなか、厳しい日射しと視線をやわらげるファブリックをつくるため、堤さんは現場でさまざまな比較検討を行った。「粘り強くいろいろなケースについて、何度もやりとりしていただきました」。1カ月以上はかかる特注生地の制作時間も確保しながらのことで、その対応ぶりが錦織さんの心に残っている。「内部仕上げの木の質感にナチュラルなファブリックを合わせたいと考えていたところに、とてもいい選択肢を提示してくれました」と言うのは、「Diagonal Boxes」(36ページ)を設計したARTENVARCの川島龍久さんと佐藤桂火さん。

堤さんは「建築家の考え方と、住まい手の方の使い方、風や光の入り方など条件を合わせて絞り込んでいくと、理想の一枚が現れるような気がします」と言う。そのために注がれる大きなエネルギーが堤さんの明るい表情の下に秘められている。